
 学 会 記 事

第38回新潟麻醉懇話会

第17回新潟ショックと蘇生・集中
治療研究会

日 時 平成5年6月26日(土)

午前10時より

場 所 新潟大学医学部

第2講義室

I. 一般演題

1) 結節性硬化症に合併した小児腹部大動脈瘤
手術の麻醉経験

津久井 淳 (新潟大学附属病院
手術部)
野口 良子・飛田 俊幸 (同 麻醉科)
本多 忠幸 (同 集中治療部)

結節性硬化症(Bourneville Pringle 病)は、精神遅滞、痙攣発作、皮脂腺腫を3主徴とする母斑症の一つで、全身臓器の過誤腫様変性により、多彩な症状を呈する稀な疾患である。他方、大動脈瘤は動脈硬化などによる血管壁の脆弱化が原因で発症し、小児例は極めて稀である。今回、結節性硬化症に合併した小児の腹部大動脈瘤に対する人工血管置換術の術中管理を経験した。硬膜外麻酔を併用したバランス麻酔、脳波を含む厳重なモニタリングが管理上有用であった。

2) 新生児巨大頸部腫瘍摘出術の麻醉経験

津久井 淳 (新潟大学附属病院
手術部)
田中 剛・野口 良子 (同 麻醉科)

新生児期の頸部腫瘍では嚢胞状リンパ管腫が多いが、充実性の腫瘍は少ない。また頸部の巨大腫瘍を有する症例では周術期の気道確保に難渋することがある。今回、径9cmに及ぶ新生児の巨大頸部腫瘍摘出術の術中管理を経験したので報告する。

[症例] 40週、3380gで経産正常分娩にて出生の女児。家族歴に特記すべきことなし。出生時より巨大頸部腫瘍を指摘され、4生日に本学小児外科に転科入院した。腫

瘍は径約9cmで、前頸部を完全に覆いつくし、頭部は右後方へ偏位していた。

[麻醉経過] 麻酔薬、筋弛緩薬の投与による、気道閉塞の可能性を考え、静脈路確保下に意識下挿管を行った。十分なモニタリング、ラインの確保の下、術中管理を無事終了した。

3) Prader-Willi 症候群患者の麻醉経験

富士原秀善・野口 良子
飛田 俊幸・津久井 淳
海老根美子・宮田 玲子
国分誠一郎・福田 悟 (新潟大学麻醉科)

演者らは、脊椎側彎症を合併した Prader-Willi 症候群患者の麻酔を経験したので報告する。本症候群は新生児期の筋緊張低下、乳児期より著明となる肥満、知能発育遅延、外生殖器形成不全を主な症状とし、約50%の例で脊椎側彎症を合併すると報告されている。麻酔管理上の問題点として、脊椎側彎症の麻酔管理上の問題点に加えて、肥満(静脈路確保困難、呼吸機能低下、挿管困難の可能性)、耐糖能異常、体温の変動、筋弛緩薬に対する異常な反応性があげられる。本症例では、開胸手術(前方固定)に際し、ダブルルーメンチューブを用いて呼吸管理を行い、また術後選択的呼吸管理を施行した。耐糖能、体温変動、筋弛緩薬に対する反応性の異常はみられなかった。

4) 褐色細胞腫を強く疑われた向精神薬長期服用患者の麻醉経験

木下 秀則・本間 富彦 (竹田綜合病院)
遠山 誠・傳田 定平 (麻醉科)

精神分裂病にて長期療養中、発作性の高血圧を呈し、血中・尿中カテコラミン高値より褐色細胞腫と診断され、腫瘍摘出術を施行されたが、術中著しい血圧の変動もなく経過した症例を経験した。echo、CTより左副腎に腫瘍認め、¹²³I-MIBG シンチ等施行したが、積極的な所見は得られなかった。静脈血カテコラミンサンプリングで左副腎静脈のカテコラミンが3分画とも高く、褐色細胞腫の診断のもと腫瘍摘出術が施行されたが、術中循環動態変動なく平穏な麻酔管理に終わった。病理で無機能性副腎腺腫と診断された。患者はブチロフェノン系及びフェノチアジン系薬剤を長期にわたり服用しており、カテコラミンに対する反応性が低下していた可能性もあり、循環不全に対し万全の態勢で臨むべきと思われた。